

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 22日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520509

研究課題名（和文）節および名詞句の極性と構造に基づく文法理論研究

研究課題名（英文）A Study of Grammatical Theory Based on the Polarity and the Structures of Clauses and Noun Phrases

## 研究代表者

西岡 宣明（NISHIOKA NOBUAKI）

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：80198431

研究成果の概要（和文）：本研究は、節と名詞表現の並行性を生成文法のミニマリスト・プログラムにおけるフェーズ理論に基づき考察し、節が CP と vP、名詞表現が DP と nP のフェーズと呼ばれる派生の単位であることを極性、移動、スコープ解釈などの様々な現象に基づき明らかにした。また、フェーズ主要部が1つの機能範疇からなるのではなく、極性、話題、焦点などの複数の機能範疇からなるとする分析に照らし、フェーズ理論の妥当性を検証し、その方向性を示した。

研究成果の概要（英文）：This study has explored the parallelism between clauses and nominal expressions based on the phase theory of the Minimalist Program in generative grammar and explicated that CP/vP and DP/nP are the units of the derivation for clauses and nominal expressions, respectively, in light of various phenomena including polarity, movement and scope. In addition, it has verified the validity of the phase theory, in light of the split CP analysis and suggested the direction of the theory.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：文法、生成文法、ミニマリスト・プログラム、フェーズ理論

## 1. 研究開始当初の背景

半世紀以上前に提案された生成文法理論は、人間の脳の中にある言語機能の解明に向

かい着実に進展してきた。特に 90 年代以降提案され、現在も活発に研究が進められているミニマリスト・プログラムにより言語研究

は大変興味深い方向へと向かっている。ミニマリスト・プログラムは儉約性、簡潔性、非冗長性といった言語外の要因である経済性の原理に言語も支配されているという視点から言語現象を捉えなおし、普遍文法の解明をめざすものである。特に近年(Chomsky (2000, 2001, 2004, 2006, 2008))、計算量の軽減という点から、CP、vP を派生の単位とするフェーズ理論がだされておられ、そこでの重要な提案の 1 つに、「フェーズがすべての操作を駆動する」(Chomsky (2008))という仮説(PDOH)が注目されてきた。本研究代表者はこれまで、英語と日本語の否定文を中心に研究を進め、英語の否定文は、TP の上位に機能範疇 PolP があり、そこに否定素性が(Agree と呼ばれる操作を通して)あることにより否定文として認可されるのに対して、日本語は、vP の上位に NegP があり、そこに否定素性があることにより否定文として認可されることを主張してきた。そして、そのことにより、否定のスコープの問題、否定極性表現(NPI)と否定一致表現(NCI)の分布を説明し、そこに働く一般的なメカニズムにより、英語の多重 wh 疑問文の認可の問題が説明できることを明らかにした。しかしながら、TP の上位が CP のフェーズ領域であるとする、PolP の理論的位置づけが問題になる。CP を細かくわけて考える Rizzi (1997, 2004)の機能範疇分割理論にそって考えると、これらもフェーズの一部を構成するものと考えられる。また、vP の上位にある NegP の vP フェーズ領域との関係も問題になる。したがって、極性現象をフェーズ理論に照らして考えることにより、フェーズの詳しい内部構造が明らかになると同時に PDOH の妥当性が検証されることになり、理論構築への実質的な貢献が期待できるのではないかと考えた。また、本研究分担者は、これまで名詞句の内部構造について詳しく研究し、DP の内部に nP があることを主張してきた。したがって、本研究分担者の知見を加え、CP と DP の並行性を探求する研究は、双方の研究の有機的な連携となり、斬新で有意義な研究となると確信し、本研究の申請を行った。本研究が取り組む節と名詞表現の並行的構造研究は、vP を内部に含む CP と nP を内部に含む DP の並行性を検証するものであり、CP、vP に加えて DP、nP がフェーズとして機能することの実証的研究となる。

## 2. 研究の目的

節と名詞表現はどこまで似ていて、どこが違うのであろうか?」本研究はこの素朴な問いに、最新の生成文法の理論的観点から有意義な答えを提供することを目指すものである。具体的には本研究は、節と名詞表現の並行的構造に対して、極性、演算子のスコープ

の問題を射程にいった実証的な肉付けを行うものである。その際、Rizzi (1997, 2004)の CP を複数の機能範疇に分割する分析(CP 分割理論)と Chomsky (2008)のミニマリスト・プログラムにおけるフェーズ理論に照らし、その構造研究の理論的意義と言語事実に対する新たな視点を提供することを目的としたものである。すなわち、本研究は、英語を中心とする幅広い言語事実に基づき、節と名詞表現の並行性ならびに差異を実証的に研究し、

- (1) 文法理論構築への貢献
- (2) 言語事実の背後にあるメカニズムの解明
- (3) 英語を中心とした言語現象の理解を深めること

を目的としたものである。

## 3. 研究の方法

現代英語を中心に、節と名詞表現の内部構造の並行性を極性ならびにスコープ現象を基に研究し、フェーズ理論の妥当性を検証し、言語事実の背後にあるメカニズムの解明と文法理論構築への貢献を目指す本研究の目的を達成するためには、最新の理論的動向を十分に見極めることが必要であると同時に、できるだけ多くのデータと照らした実証的研究が必要と考え、以下分担と手順で研究を行った。

### <研究代表者>

CP, vP の内部構造とそれに関わる文法現象の研究



フィードバック⇒統合、高次の理論化

### <研究分担者>

DP, nP の内部構造とそれに関わる文法現象の研究

- (1) 基礎資料の収集と作成

研究代表者がこれまで構築してきた英語否定文に関する考察を発展させ、CP と vP 領域を中心に極性とスコープに関する文献を整備し、また、インフォーマントチェックにより、基礎資料の収集と作成を行った。分担者は、これまで行ってきた名詞句の内部構造研究を発展させ、DP と nP に関する文献を整備し、インフォーマントチェックにより、基礎資料の収集と作成を行った。また、ミニマリスト・プログラムの最新の動向を的確に把握するために、同時に理論的考察に必要な言語学、英語学の文献を整備した。

- (2) 個々の現象の分析と理論化

そして Topic, Focus という概念を軸に極性と解釈の問題と照らして、統語構造を分析し、移動と認可現象を説明するために派生に基づく理論化を CP、vP、DP、nP に関して行った。

(3) 総合、理論的意義の考察

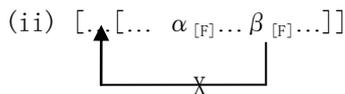
そのことにより、CP、DP フェーズ内での機能範疇間の相互作用と内部構造を明らかにし、本研究のもつ理論的意義を考察し、文法理論構築への貢献をめざした。

4. 研究成果

本研究では (i) のような節と名詞表現の構造的並行性を Rizzi (1997, 2004) の CP を複数の機能範疇に分割する分析 (CP 分割理論) と Chomsky (2008) のミニマリスト・プログラムにおけるフェーズ理論に照らして、その構造研究の理論的意義を探求し、様々な言語事実に基づき、理論的考察を行った。その研究内容と成果は、(1)-(4) にまとめられる。

- (i) a. 節 [CP... [TP... [vP...]]]
- b. 名詞表現 [DP... [XP... [nP...]]]

(1) まず、節構造の研究としては、CP がフェーズと呼ばれる派生の単位を形成し、その一部に極性領域にかかわる機能範疇を想定する PolP 分析の妥当性を NPI の認可、部分否定の認可、wh 句の移動との比較などの諸現象を中心に検証した。そして、いずれの現象の説明にも派生的考察と下記に図示される介在効果が個々の現象の理解に重要であることを示して、現象の背後にある一般化を示した。



また、フェーズ理論は、派生はフェーズ単位ごとに進み、その補部領域を音声部門と意味部門へと送り出す (トランスファーの適用) という (iii) に示される仮定を含み、それゆえに補部領域に残された要素はそのフェーズ外へ移動できないことを主張する。



そして、近年のフェーズ理論は、「フェーズ

がすべての操作を駆動する」という仮説 (PDOH) に基づきフェーズ主要部による操作はすべて同時に生じるという主張するものであるが、これらの主張がいずれも、複数のフェーズにまたがって認可される NPI の認可に関して経験的な問題があることを指摘し、代案を提示して、フェーズ理論のとるべき方向性を示した。(その成果は、以下5の③として公刊した。)

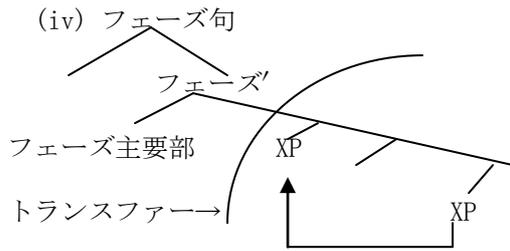
(2) また、名詞表現の研究としては、英語名詞句の内部構造解明の一環として、節構造と同様に、フェーズが名詞句内部にも確認されるかという点についての知見を得るため、英語名詞句からの疑問詞の取り出しおよび、名詞句の受動化などについて分析し、名詞句内にもフェーズが存在することを示唆する証拠を得た。また、名詞句内部にフェーズの存在を仮定することの妥当性を示すため、英語動名詞句が示す種々の文法特性について考察して、その仮定により、従来の研究よりも、これらの諸特性を合理的に説明できることを示した。(その成果は、5の①、②として公刊した。)

(3) 上記の極性ならびに移動に関する分析を継承、発展させ、トランスファー領域に関するフェーズ理論の意義と問題点を明らかにした。まず、動詞句に関する vP フェーズと名詞句に関する nP フェーズの内部構造に焦点をあて、CP フェーズと DP フェーズとの並行性と違いを探求した。vP フェーズに関しては、極性ならびに焦点化に関する NegP と FocP の位置づけを中心に CP フェーズにおける PolP との関係をさぐり、その並行性を日本語を中心とする英語以外のデータも射程にいれて考察した。(その成果は 5 の⑤において公表した。)

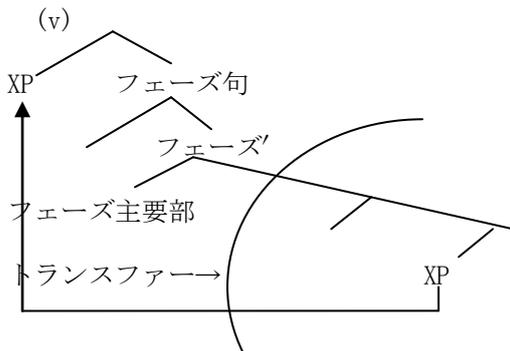
また、nP フェーズに関しては、DP フェーズならびに vP フェーズとの並行性を探求し、同様に nP 内での機能範疇の存在の可能性と N の補部要素との関係を様々な種類の派生名詞句の派生に基づき考察し、要素の抜き取りとスコープの問題を解明した。(その成果は 5 の⑥、⑨において公刊した。)

さらに、移動した要素が元の位置で解釈されるかどうかという再構築現象に関して近年盛んな議論がなされている (Takahashi and Hulsey (2009)、Lebeaux (2009)) ことを踏まえ、それらの問題点を指摘した。そして、NPI の認可や照応形の束縛条件と照らして、英語、日本語を中心に考え、移動がトランスファー領域を超えるかどうかを再構築現象を考えるにあたり重要であることを明らかにして、(iv)、(v) に示される派生の違いが、再構築現象の背後にあることを示し、A 移動と A' 移動の違いを原理的に引き出した。(そ

の成果は5の⑦において公刊した。)



④トランスファー領域内での移動・・・再構築がない →A 移動には、再構築がない。



⑤トランスファー領域を超える移動・・・再構築が可能 →A 移動には、再構築が生じる。

(4) 上記のように節と名詞表現の並行的構造をフェーズ理論に照らして考察する本研究により、英語における節と名詞表現のフェーズに関する並行性ならびにその理論的意義を明らかにしたが、Rizzi (1997, 2004)のCP 分割理論に照らしてさらなる考察をおこなった場合、Pol/Neg はフェーズ内部と関係する機能範疇であるのに対し、フェーズ外部と関わる機能範疇の構造の問題が残された。そこで、本研究の総括として、節、名詞表現両方の談話に関わる特性を検討した。

節構造に関しては、極性、演算子のスコープ現象において例外的と思える現象に対し、CPフェーズの外側に下記のようなメタ言語的な談話に関わる機能範疇の存在があり、それがTP内の要素と直接焦点関係を結んでいることを想定することによりうまく説明できることを示した。(5の⑧として公刊した。)

(vi) [Q/NEG<sub>CP</sub> [TP...]]

また、名詞表現に関しては、派生名詞句の派生過程と名詞の定性に焦点をあて、名詞表現の内部構造から機能範疇とフェーズの働きを明らかにした。(その成果は、5の⑨として公

刊した。)

本研究は、フェーズ理論に照らして節と名詞表現の並行性を探求し、これまで極性、移動に関して適切な説明がなかった現象に対して、説明を与えたことと、フェーズ理論に対して、その妥当性と方向性を論じた点で独自性があり、文法理論構築への貢献を果たした。

また、上記(4)に述べたように談話とのつながりからみた、フェーズ分析の可能性が開かれ、今後は名詞表現の統語現象に対する例外的振る舞いをする談話連結表現の考察に対して、同様に分析を適用することにより名詞表現の内部構造とその統語的分布の新たな解明が見込まれる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ①西岡宣明、「否定文とA移動の再構築現象」、『収、開拓社、査読有、2012、pp.190-204 ことばとこころの探求』大橋 浩他編所
- ②西岡宣明、「コミュニケーションの道具としての言葉—「発話の繰り返し」と文法現象」、『コミュニケーションと共同体』光藤宏行編所収、九大出版会、査読無、2012、pp.61-75
- ③増富和浩、「(不) 定名詞句の内部構造について: the + 形容詞の名詞性からの一考察」、『ことばとこころの探求』大橋 浩他編所収、開拓社、査読有、2012、pp.163-176
- ④西岡宣明、「否定現象を巡る機能範疇の統語特性と解釈特性」、日本英文学会第83回大会 Proceedings、査読無、2011、pp.156-158
- ⑤増富和浩、「基体となる要素のタイプによる英語派生名詞句の派生過程の類似点と相違点について」、宮城学院女子大学『研究論文集』、査読無、113号、2011、pp.29-41
- ⑥Masutomo, Kazuhiro、書評論文: On *InterPhases: Phase-Theoretic Investigations of Linguistic Interfaces*、*Studies in English Literature*、査読有、52、2011、pp.196-201
- ⑦西岡宣明、「文否定と否定素性移動」、『否定と言語理論』加藤泰彦他編所収、開拓社、査読有、2010、pp.51-73
- ⑧Kazuhiro Masutomi、"On Nominal Phase and Its Interpretation: A Minimalist Approach"、『人文社会科学論叢』(宮城学院女子大学人文社会科学研究所)、査読無、19号、2010、pp.1-19
- ⑨増富和浩、「英語動名詞句の名詞性および動詞性と形容詞・副詞の認可について—ミ

ニマリスト統語論の観点から一」『研究論文集』（宮城学院女子大学紀要）、査読無、109巻、2009、pp. 41-55

〔学会発表〕（計1件）

- ①西岡宣明、「否定現象を巡る機能範疇の統語特性と解釈特性」、日本英文学会第83回大会シンポジウム『機能範疇の統語特性と解釈特性を巡って』、2011年5月22日、北九州市立大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

西岡 宣明 (NISHIOKA NOBUAKI)  
九州大学・大学院人文科学研究院・教授  
研究者番号：80198431

### (2) 研究分担者

増富 和浩 (MASUTOMI KAZUHIRO)  
宮城学院女子大学・学芸学部・准教授  
研究者番号：90452795

### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：